

著「 」

高等教育最新レビュー、大学マネジメント 2009.3 国立大学マネジメント研究会刊を読む Going Global 3 に参加して

1. フランスの大学は、

- (1) 改革が遅れ、増加を続ける大学生に教員増や学生の支援体制の整備が追いついていない。
- (2) 社会や企業のニーズに対応した教育改革が遅々として進まず、
- (3) 第1期課程(2年間)の脱落率が5割を超えている。

2. 一方、日本の大学は

- (1) 教員の英語力が低い、
- (2) 教員が教育にあまり熱心ではない、
- (3) 教育プログラムが構造化されておらず魅力に乏しい
- (4) 米国のような大規模な奨学金制度がない、
- (5) 日本人の学生が留学生との交流にあまり興味を示さない
といった課題を抱えている。

3. (1) 日仏に比べると、英米の留学生受け入れ態勢の良さは際立っている。

- (2) 両国とも様々な葛藤や摩擦を経験しつつも、外国人を確実に社会の一員として同化してきており、
- (3) 英語教育の体制や
- (4) 移民などの外国人を社会に迎え入れるためのボランティア・システムや宗教団体の活動も活発である。

- (5) 才能のある若者を見出し、生活費までを含む奨学金を柔軟に支給する体制も整備されている。
- (6) 留学生は言語・文化の違いという大きなハンディキャップを背負って異国の大学に来るのであるが、こうしたハンディを乗り越えるための支援を行うという考え方は、英国の大学には広く根付いている。
- (7) 身体的なハンディだけでなく、
時間・距離のハンディ(成人)、
財政的なハンディ、
家族的ハンディ(シングル・マザー)
学習経験のハンディ
など様々なハンディをもつ学生に対して支援体制をもっている大学は少なくない。
- (8) その結果、英米のキャンパスには、教員と見間違えるような中高年学生や、子供をキャンパス内の保育施設に預けながら学ぶ女性の姿は珍しくない。
- (9) 留学生の受け入れもこうした流れの延長線上にある。

P.34

[コメント]

英国、オーストラリア、米国と比べて日本と仏国は留学生を引きつける魅力に極めて乏しい。その理由を英米と対比した示唆に富むレポート。月刊「大学マネジメント」の編集長で立命館大学副総長である本間教授から学ぶことは大きい。

- 2009年4月16日林明夫記 -